

人生の下り坂に老荘思想

「大学の道は、明德を明らかにするに在り」

約100人の声が朗々と響き渡る。今月10日、東京都内で開かれた中国古典を学ぶ講座の1コマだ。

生まれながらに授けられている徳を積むのが人のつとめ――。それでは、徳を積むとはどういうことか。

「自己の最善を他者に尽くしきることです」と講師の東洋思想研究者、田口佳史さん(69)は解説する。

例えば、何かを頼まれたり、物を尋ねられたりしたとき。全力でこたえれば、「ありがとう」と返ってくるだろう。「一流企業にい

たとか、役職とかは関係なく、こうした感謝の人間関係を何人と築けるか、が大切なんです」

たとえ独りで生きていても、一日1人に最善を尽くしければ、年に365人、結び合える人が生まれる。

「中国の思想家の言葉も、著した中国古典は、愉快な人生を送るために何が重要か、教えてくれているんです」と田口さん。例えば紀元前500年前後の春秋時代の思想家、孔子の言葉で弟子がまとめた「論語」。儒家の祖・孔子は、理想の秩序「礼」の姿や、「仁」の意義を説いた。「大学」

「孟子」などの四書、「易経」「書経」など五経とあわせ、儒家の経典だ。

一方、やはり春秋時代にいたとされる哲学者で道家の祖・老子の教えを著したのが「老子」だ。「自分は

いまの状況に満足していい」と感謝して生きると、どんな状況にあっても幸福感に満たされる――と、説いた。荘子と合わせ、「老荘思想」と呼ばれる。

「上り坂の儒家、下り坂の老荘」といわれるように、特にシニア世代にお勧めなのが老荘思想という。

田口さんの講座で10年近く学んできた杉崎修さん

(59)は、5年前に大手メーカーを退職した。老子の「足るを知る者は富む」を体感したのは、退職後3年半ほど経ってからだった。

「例えば学生時代はレック、課長ならオールドと、高級ウイスキーをめざしたように、少しでも上へ上へと働いてきた。今は、安い酒でもおいしく味わえるようになってきた」と笑う。

「上り坂は必死で、足元ばかりみていた。下り坂は景色を味わいながら、ゆっくりに歩いている感じです」